【ポスター発表】

知的障害者及び家族の生活再建と受援力に関する研究３

ー生活再建過程における家族機能とレジリエンスの関係ー

○　明星大学　　氏名　吉川かおり（会員番号2069）

キーワード：障害者家族　家族機能　レジリエンス

１．研 究 目 的

災害時には、平素から存在している問題・課題が浮き彫りになるが、生活再建支援において重視されている事項は、住居・地域といった形として目に見えるものが中心となっている。この状況は、障害児・者のいる家族においても同様であり、家族の凝縮性が高まりやすい生活再建過程において、各家族が持つ機能的課題については目が向けられてこなかったという状況がある。

本研究では、東日本大震災で被災した知的障害（発達障害を含む）者の家族を対象とした調査から抽出された、家族のレジリエンスに影響を与えている要因すなわち、災害によって生じた要因と、家族機能に関連した要因のうち、後者について詳細な考察を行い、支援策を検討することを目的としている。

２．研究の視点および方法

（１）視点：家族機能を検討する際の指標として設定した「子どもとの関わり方のタイプ」分類の妥当性を検証し、レジリエンス得点との関連を分析する。

（２）方法：公益社団法人日本発達障害連盟が実施した調査において収集されたデータを解析する。この調査は、厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業(身体・知的障害分野)「災害時における知的・発達障害を中心とした障害者の福祉サービス・障害福祉施設等の活用と役割に関する研究」(H24～26年度）の一環として2014年に実施されたものであり、岩手・宮城・福島県の手をつなぐ育成会などを通じて配布し、回答数325（回収率32.7%)、回答者は、女性が84.6%、20代0.3%、30代5.7%、40代19.9%、50代27.1%、60代26.2%、70代以上20.8%。レジリエンス尺度は平均50.3（SD20.0）であった（本調査の結果概要については、日本社会福祉学会第64回大会において、「知的障害者及び家族の生活再建と受援力に関する研究１」として報告している)。

３．倫理的配慮

公益社団法人日本発達障害連盟が実施した調査データを利用し解析することについて、明星大学研究倫理審査委員会の審査を受け承認されている（平成29年9月22日付)。また、本演題に関連して、開示すべきCOIはない。

４．研 究 結 果

（１）子どもとの関わり方のタイプ

調査票（表１参照）では、17 項目について質問し、該当数の多寡によって５つに分類することを想定していた。結果の内訳は、「尽くし型」61.2%、「かじ取り型」58.5%、「気遣い型」40.6%、「完全主義型」63.7%、「控え目型」30.5%（325 回答）であった。

表１　障害のある子どもとの関わり方調査票

Q 9-1) 以下のそれぞれの項目について、現在のあなたの特徴に最もあてはまる数字を一つだけ○で囲んで下さい。

0＝全く違う　1＝いくらかそうだ 2＝まあそうだ　3＝その通りだ	全く違う	いくらかそうだ	まあそうだ	その通りだ
1. 自分のやりたいことをしている時より、障害のある子どもの世話をしている時の方が、充実した気持ちになる	0	1	2	3
2. 障害のある子どもの世話をしていないと不安になる	0	1	2	3
3. 障害のある子どもが自分でできることでも、待たずに手助けしたりやってしまうことが多い	0	1	2	3
4. 障害のある子どもの問題行動を自分の責任だと思ってしまうことが多い	0	1	2	3
5. 障害のある子どもが誰かから何か質問された時、代わりに答えることが多い	0	1	2	3
6. 障害のある子どもを思い通りにしようとしている	0	1	2	3
7. 障害のある子どもの行動が気に入らないと、その子にあたってしまう	0	1	2	3
8. 子どもに障害があることを自分のせいだと思って自分を責めてしまう	0	1	2	3
9. 障害のある子どもが何かにこだわった時、いつもそのこだわりを受け入れてしまう	0	1	2	3
10. 障害のある子どもの感情の起伏を気にしてびくびくしている	0	1	2	3
11. きちょうめんだ	0	1	2	3
12. 家事や仕事をきちんと予定通りこなしたい	0	1	2	3
13. 小さな失敗をいつまでも気にしてしまう	0	1	2	3
14. 自分でどうしようもない状況にあうと困ってしまい、嫌な気分がいつまでも続く	0	1	2	3
15. 世間体や他人の目がいつも気になる	0	1	2	3
16. 自分のことが嫌になったり、自分にいらつくことがよくある	0	1	2	3
17. 自分の考えていることに対して、まわりの人の賛成が得られないと行動にうつせない	0	1	2	3

これらの分類の妥当性を検討するために、17 項目の平均と標準偏差を算出したが、天井とフロア効果は見られなかった。主因子法による因子分析を行ったところ、固有値の変化は 4.7，1.9，1.6，1.4，…，であり、4 因子が妥当であると考えられた。十分な因子負荷量を示さなかった 3 項目（項目 1，6，10）を除外して直交回転を行った。その結果、第 1 因子は項目 7，13，14，15，16，17、第 2 因子は項目 2，3，5，9、第 3 因子は項目 11，12、第 4 因子は項目 4，8 で構成されていることが分かった。第 1 因子を控え目型、第 2 因子を尽くし型、第 3 因子を完全主義型、第 4 因子を自責型と命名した。

また、次の 4 つのクラスターが抽出された。1：完全主義型の点数が低い、2：控え目型の点数が低い、3：控え目型・尽くし型・自責型の点数が高い、4：控え目型・完全主義型の点数が高い。

（２）レジリエンス得点との関係

4 つのクラスターとレジリエンス得点（コナー・デビッドソン・レジリエンス尺度日本語版による）との関連を見たところ、表 2 の通り、有意な差が見られた。

表2　子どもとの関わり方クラスターとレジリエンス得点

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間 下限	平均値の 95% 信頼区間 上限	最小値	最大値
クラスター1：第3因子の点数低い	104	50.42	17.25	1.69	47.07	53.78	7	99
クラスター2：第1因子の点数低い	82	62.24	17.46	1.93	58.41	66.08	3	99
クラスター3：第1, 2, 4因子の点数高い	40	42.58	17.94	2.84	36.84	48.31	0	74
クラスター4：第1,3因子の点数高い	43	47.02	14.79	2.26	42.47	51.58	15	81
合計	269	52.32	18.38	1.12	50.11	54.52	0	99

F検定；F=15.41,p<0.001

多重比較を行ったところ、クラスター2 対クラスター1、クラスター2 対クラスター3、クラスター2 対クラスター4 において、有意差があることが分かった（p<0.001）。

５．考 察

総じて「控え目型」（第 1 因子）の点数が低いことがレジリエンス得点の高さに影響していることから、日常生活での取り組み（例えば、障害理解や社会的障壁への対応スキルを含めて、個人・家族の強みを生かせるような支援策）が、被災後の生活再建の下支えになることが示唆される。災害時支援や生活再建支援過程においては、家族機能の健全化を含めた支援ができるようなチーム構築や支援プログラムの拡充が必要であると考えられる。